フィールド（現場）からの風 686

宮田守男

現場で見聞させる大切さを

23日の通常国会の冒頭、衆院本会議で額賀福志郎議長が解散詔書を読み上げ解散された。降雪等の悪条件の中の選挙だが多くの人の投票を期待するばかりだ。後漢の政治家楊震の賄賂の受け取りを拒否した時の言葉「天知る・地知る・我知る・人知る」は「だれも見ていませんから」と金を差し出すかつての部下王密に「誰も知るまいと思っても必ずだれかが知るところになる」と諭した。不正行為や悪事は必ず露見する。後漢書に残る「四知」の故事の由来だ。自分たちの望む施策を選択する大事な機会だ。自らの意思を尊重する社会存続のために責任ある行動を願っている。

22日に長野市生涯学習センターで開催した「日中友好協会新春座談会」に出席する。2025年活動報告と2026年交流計画が報告された。続いて各地区協会・女性委員会・長野ラジオ孔子学堂から取組報告があり、積極的な意見交換会となった。

国会の初の予算委員会において高市首相の発言で日中関係に大きな影響を与えた状況でも、民間レベルの交流の重要性を再確認できた座談会でもあった。西堀正司県日中会長の新春講演で12月24日に前日本中国友好協会名誉会長（前会長）丹羽宇一郎の逝去の報告。伊藤忠商事代表取締役を経て民間初の駐中国日本大使を務めた後に2015年から24年まで会長に就任して日中関係の発展に尽力した。伊藤忠社長に就くと、不動産価格の下落などで積み上がった不良資産の一括処理に踏み切り、8882億円の最終赤字に陥ったがファミリーマートへの出資など攻めの施策も進め、過去最高の7015億円の最終利益をたたき出し、リストラに取り組む際は神奈川県の郊外にある自宅から電車で東京都心の本社に通勤し、役員報酬を返上した経営者でもある。「仕事と心の流儀」の著書では、「何げなく発せられた一言や、ふと目にとまった文章が、人を勇気づけることがある。時には、受け止めた人にとって新たな取組に挑戦するチャンスともある」・「情報を敏感に受け止め、丁寧に調べることが将来の夢の種をつかむ行動につながる」と指摘している。さらに調べるだけでなく、その情報が実際に現場で確かめることが大切だとも。経費節減の意識ではなく、自ら現場で見聞させる大切さを実践させることを意識すべきだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

日中友好新春座談会は中国関係者の出席もなく、今後の日中友好へ緊張感ある会議でもあった